

泉鏡花「年譜」補訂 (十六)

吉田 昌 志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月二十日)収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号(平成十九年一月一日)掲載の「補訂(一)」、七九七号(平成十九年三月一日)掲載の「補訂(二)」、八一九号(平成二十一年一月一日)掲載の「補訂(三)」、八二二号(平成二十一年三月一日)掲載の「補訂(四)」、八二六号(平成二十一年八月一日)掲載の「補訂(五)」、八四三号(平成二十三年一月一日)掲載の「補訂(六)」、八四五号(平成二十三年三月一日)掲載の「補訂(七)」、八五〇号(平成二十三年八月一日)掲載の「補訂(八)」、八五五号(平成二十四年一月一日)掲載の「補訂(九)」、八五七号(平成二十四年三月一日)掲載の「補訂(十)」、八六二号(平成二十四年八月一日)掲載の「補訂(十一)」、八六七号(平成二十五年一月一日)掲載の「補訂(十二)」、八六九号(平成二十五年三月一日)掲載の「補訂(十三)」、八七九号(平成二十六年一月一日)掲載の「補訂(十四)」、八九一号(平成二十七年一月一日)掲載の「補訂(十五)」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」、の四部に分かち、書式を次の通りとする。

- 一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。
- 一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻

字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。

- 一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。

- 一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文の誤記・誤植は、「」内に補止した。

- 一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。

- 一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

- 一、文中の敬称は、原則として省略した。
- 一、必要に応じて、「*」のあとに注記事項を補った。

「誤記・誤植の訂正」

年譜

●60頁上段18行目 西本道丹 ↓ 西本道圓

補訂(七)

●54頁下段3行目 一門一答録 ↓ 一問一答録

補訂(十二)

●5頁上段23行目 園江玄哉 ↓ 園江立哉

「本文の訂正・追加」

明治三十一年(一八九八) 戊戌 二十六歳

一月 三十日、博文館の大橋乙羽の斡旋する第二回「文学家美術家雑話会」

(於芝紅葉館、午後二時開会) に出席した。

【典拠】「海内彙報 文学美術」(「太陽」四巻四号、明治三十一年二月二十日)

◎第二回文学美術家談話会 は去月三十日午後二時より芝公園の紅葉館に開かれき。会するもの七十九名。本館の乙羽の挨拶、桜痴居士の演説あり。次会は来る三月に開かるべしとぞ、かゝる社交的会合の度重なりて、文学者間の交情漸く暖まると共に、従来の如き割拠の弊薄らぐむ。会するもの左の如し。

角田勤一郎 松原岩五郎 新海竹太郎 江見水蔭 長谷川誠也
下村芳明 武内桂舟 水口鹿太郎 戸川残花 小堀鞆音
梶田半古 太田資順 高橋玉淵 岡本甚吉 持田欽也
三宅青軒 川崎巳之太郎 佐々木信綱 後藤宙外 尾形月耕
菊地鑄太郎 久保田米斎 島文二郎 岡田正美 島崎柳塙
野末嘉七 上田 敏 泉鏡太郎 尾崎紅葉 広津柳浪
杉浦行宗 巖谷季雄 溝口禎二郎 角田真平 六角注多良

木村鷹太郎 大橋新太郎 高山林次郎 杉儀之助 高田早苗
前田健次郎 徳富猪一郎 村田丹陵 野崎城雄 坪谷善四郎
落合直文 水野年方 石川光明 大野洒竹 筒井年峯
山本直良 尺秀三郎 香川勝広 石橋友吉 岡[関]如來
新納忠之助 岡本勝元 横山秀磨^(マ) 幸田露伴 幸田成友
合田 清 岡崎雪聲 坪内雄蔵 島村抱月 山名貫義
福地源一郎 福井江亭 吉岡 育 川端玉章 寺崎廣業
松本君平 富岡永洗 今村長賀 笹川種郎 長田忠一
白川次郎 田岡嶺雲 大橋乙羽 齊藤八三郎 総員七十九名
当日乙羽氏は一部の人を集めて撮影「影」せり。掲げて本誌巻頭にあり。

【注記】

「年譜」では、江見水蔭『自中心明治文壇史』(博文館、昭和二年十月二十八日)と「文芸倶楽部」(四巻二編、明治三十一年二月十日)の「時報」欄記事に拠って詳しい内容を紹介したが、その前の部分について、典拠から、この会の斡旋が大橋乙羽(および博文館)であること、開会時刻等を補った。

会の名称も記事によって区々だが、別項(新項目)の第一回(明治三十年十一月二十三日)の呼称に統一すべく訂正した。

なお、乙羽の撮った記念写真に写る二十七名のうちに、紅葉、鏡花は入っていない。

明治三十三年(一九〇〇) 庚子 二十八歳

三月 十一日、川上眉山宅(牛込二十騎町)の文学者による小説口演会(文学者講談会トモ、午後一時開会)で「湯女の魂」を口演した。他に京の藁兵衛「久振」、巖谷小波「墓辺の薔薇」、長田秋濤「血鬪腰」、尾

崎紅葉「茶碗割」の口演があった。来会者は六十余名。紅葉によれば鏡花のものは二時四十五分まで「劃然一時間」であったという。二十五日発行の「新小説」の「時報」でこの会のことが報じられ、「其速記は新小説臨時増刊として現はるべし」と予告された。

【典拠1】「小説口演会の景況」（読売新聞）明治三十三年三月十三日付・三面

一昨十一日午後一時より川上眉山氏宅に於て開きたる小説口演会は来会者凡そ六十余名、演者及び演題は劈頭第一泉鏡花氏の「湯女の魂」処女口演としては一時間有余の時間を巧みに演じたり次は飛入として京の薬兵衛氏が「久振」といふ落語聴衆の頤を解き、次は小波氏の「墓辺の薔薇」と云ふ独逸仕込みの小話数度の場所を踏めるだけありてお手に入つたものに次に現はれしが秋濤居士、題は「血鬘髻」といふにてミユラーの悲惨なる最後を講じ、最後に紅葉山人「茶碗割」と題せる元禄頃の奇警なる一小話を流暢に講じ後水蔭氏の「別子銅山変災視察談」眉山人の「五十年」は時間迫りて聞くを得ざりしは遺憾なりき点燈頃口演会を畢りて運座を開けり

【典拠2】「文士」の消息」（新小説）五年四卷、明治三十三年三月二十五日

◎三月十一日牛込川上眉山氏宅に於て文学者講談会を催す、出演者は紅葉、小波、眉山、鏡花、秋濤、薬兵衛氏等其速記は新小説臨時増刊として現はるべし。

【典拠3】江見水蔭「文士講談（明治三十三年の春の三）」（『自己明治文壇史』博文館、昭和二十年

月二十八日）

この頃、新聞紙上では講談が大流行で、ヤ、ともすると小説を蹴飛ばすかに見られてゐた。『読売』では、まさか普通の講談を入れるとまで墮落出来なかつたので、高田先生や市島先生が苦心して、坪内先生や紅葉、それから和田垣謙三博士、松村介石、長田秋濤などを狩立て『文学口演会』といふの

を創立して、毎月牛込赤城神社境内の清風亭で、新講談を発表する事と成つた。それで其速記を『読売』へ連載するといふ趣向なのであつた。

一月二十八日に其第二回が催された（第一回の開催日は不明）その第三回目、自分にも出演せよと紅葉からの勧誘で、それでは『鮪釣り』といふのを弁じようと約した。これは、旧著『魔日の船出』を材料にしたので、その下稽古を博文館の編輯局で（退出時間後に。）試み、同僚に聴いて貰ひなどした。当日（月日失念）清風亭で、処女講談を試みたが、芝居気に富む男だけに成功の部に入つた。（高田先生は『売国疑獄鬼界ヶ島』和田垣博士は『独国劇話タリズマン』を口演した。）

この文士講談は、果然世間受けがしたので、其後春陽堂から『新小説』の臨時増刊として『春鶯囀』といふのを出版する目的で、四月某日、牛込二十騎町の川上眉山の宅で、その文士講談会を開く事と成つた。（…）

自分は卓上の水の代りに酒を用ゐたので、忽ち酔つて何を云つたか分らず。速記が出来なかつたといふので、別に『独眼龍將軍』といふのを自記して間に合せる事に成つた。

眉山は耻含んで、到頭口演をせず。後に自記で間に合せた。

【典拠4】尾崎紅葉「茶碗割」（新小説臨時増刊 春鶯囀）五年六卷、明治三十三年五月五日）

入替り立替り長い問素人講談を御聴に入れて、然ぞかし御退屈、御迷惑の事とお察し申します。水蔭君の口演が一時十分から始つて同四十分を終りましたから三十分間、鏡花のが一時二十五分から二時四十五分に至つたから、是が劃然一時間、小波君のが三時から四時五分と端が付いて、秋濤君のが四時七分から五時に至るのでありますから、前と入合せて各一時間になる、此の合計三時三十分間。衆議院に出て居れば十分交代の速記者が、二名で以て

此の三時三十分間を受持つのでありますから、是又容易ならざる筆勞。^{ひつらう}「え、引」と「それから」の多い譚を長々と四席も聴せらるゝ諸君の御難儀も、決してお大抵ではなからうと考へます。

【注記】

「年譜」では、「新小説」の時報（典拠②）により記載したが、直後の詳しい新聞報（典拠①）を見出したので、当日の項を立て、時報記事の内容を伝える記述にも訂正を加えた。

この会の呼称は、各種の記事によって区々で、また回数も異なっていて定めがたい。経緯に詳しいのは水蔭の著（典拠③）であるが、これに従えば、開催日不明の第一回に続き、一月二十八日に第二回、月日を失念した第三回があり、川上眉山宅の会は第四回になる。「四月某日」は三月十一日の誤りである。なお、「太陽」（六卷四号、明治三十三年四月一日）の彙報「文芸界のくさぐさ」には「紅葉、小波、水蔭、鏡花、眉山諸氏を弁士とせる第三回講談会は、去月十一日、牛込の眉山氏宅にて開かれき」（傍点引用者）とある。今のところ、回数についての「年譜」への記載は控えておきたい。

典拠③で水蔭は、自分の口演した「月日失念」の第三回に次いで眉山宅の会があったごとく記しているが、「読売新聞」明治三十三年五月二十一日付（三面）の「よみうり抄」に、

◎名士の口演 改良講談会は一昨日牛込清風亭に開かれたるが演題は『^{売国}疑獄鬼界ヶ島』——高田早苗氏、『^{独国}鮪釣』——江見水蔭氏、『^{独国}劇話タリズマン』——和田垣謙三氏、にて喝采の中に閉会したり、其筆記は例に依りて本紙の『口演百譚』欄に収むべし

と報じられているので、「月日失念」のこの回が五月十九日の開催であり、したがって水蔭の記述とは逆に、眉山宅の会是水蔭出演の会に先んじて開かれた、とい

うのが正しい。

これら一連の講談会に関しては、初回の尾崎紅葉「^{武蔵の名香アラヒアの林檎}東西短慮の刃」を収めた岩波書店版『紅葉全集』第八卷（平成六年五月二十三日）の須田千里氏の「解題」に詳しく、典拠も確実に明示されている。これに拠れば、「読売新聞」に会の発足の報じられたのが明治三十二年十二月十八日（「新年後の読売新聞」一面）であるから、初回の開催は十七日以前のことになる。

以下に委細を省いて、右の「解題」に基づき、開催の順をたどって、日付・場所・出演者のみを掲出してみる（名前に付した*は「口演百譚」として新聞掲載のあったもの。号ある者で重出の場合は姓を省く）。

(一) 明治三十二年十二月十七日以前 牛込清風亭 坪内逍遙・巖谷小波・長田秋濤・池田晃淵・尾崎紅葉「付」冒頭に発起人高田早苗の演説あり。

(二) 明治三十三年一月二十七日 牛込清風亭 松村介石・紅葉・松平康国・小波

(三) 明治三十三年二月十一日カ 牛込清風亭 秋濤・藤山治一

(四) 明治三十三年三月十一日 牛込川上眉山宅 江見水蔭・泉鏡花・京の藁兵衛・小波・秋濤・紅葉

(五) 明治三十三年五月十九日 牛込清風亭 高田早苗・水蔭・和田垣謙三

(六) 明治三十三年六月十六日 牛込清風亭 高田早苗

右のうち、(三)は「口演百譚」の長田秋濤「奇話一束」（三月二十六日付・二面）の冒頭に、「三月十一日／於牛込清風亭」とあるが、同日は眉山宅の口演会の日に当り、秋濤が同日に重複して出演するのは全く不可能ではないが、かなり難しかろうから、「二月十一日」の誤りではないかと考えて、(四)の前月とした。

「口演百譚」の連載状況を手がかりにしているので、今後、日付や演者に異同が生じる可能性もあるが、これまで諸書・記事により区々であった会の模様について一応の整理はつけられたように思う。

こうしてみると、眉山宅の口演会は高田早苗発起の講談会に加わった硯友社の面々が別に催した会で、これに師紅葉の縁から鏡花が参加したということになる。③の時日の確定も含め、以上の経緯に関してさらに大方の御示教を仰ぎたい。

眉山宅のあった牛込二十騎町は、牛込と市谷との境、北を牛込南山伏町に、南を市谷加賀町に接していた。眉山の年譜（伊狩章編、筑摩書房版「明治文学全集」20『川上眉山 巖谷小波集』昭和四十三年七月二十五日）によると、明治三十年に牛込北山伏町に家を持って以来、三十一年南山伏町、三十二年に二十騎町、三十六年に南榎町、三十七年弁天町、三十九年矢来町、四十年天神町と、四十一年六月に自裁するまでの十一年間に、牛込の各町を転々として七度数を数えている。口演会から三か月後の七月に「居を西郊中野に移すといふ」（『時報』「新小説」五年九巻、明治三十三年七月十五日）と報じられたこともあったが、結局牛込に留まったのである。二十騎町の家の地番はいまだ特定するに至らない。

『読売新聞』報（典拠1）が、水蔭のものを入っていないのは、酒気を帯びての口演ゆえか、あるいは冒頭を聴きのがしたからであろうが、各自の口演時間を克明に伝えている紅葉「茶碗割」の前置きには言及がある。同文に鏡花の口演の開始を「一時二十五分から」と記すものの、水蔭の終了が一時「四十分」とあるので、正しくは一時四十五分から二時四十五分までの「一時間」だったことになろう。

紅葉文には言及を欠くが、典拠1・2に名が出る京の薬兵衛の「飛入」（典拠1）の落語「久振」は、鏡花と小波の間に入ったものと思われる。京の薬兵衛の本名は堀野與七、書肆文禄堂の主人である。装丁意匠に独自の趣味があり、自身の滑稽物や児童書のほか多岐にわたる刊本で異彩を放ったが、紅葉との交際から合集『仇浪』（明治三十四年六月十三日）、『遺墨百人一首』（明治三十七年七月一日）、『病骨録』（同三月一日）、『紅葉句帳』（明治四十年四月八日）等の出版に及んだ。刈谷新三郎に「明治の出版界は、博文館が出て本が安くなり、春陽堂が出て本が美しくなった

といはれる、しかし、さうした大書肆の間に介在して、大凝りに凝った書物ばかりを出した小書肆文禄堂のあったことなども認めて然るべきだと思ふ」（『文禄堂の出版物』「文献」二号、昭和三年四月一日）との言葉がある。

なお、眉山宅の会については、田邊孝治「硯友社の素人講談会」（岩波書店版「新日本古典文学大系明治編 月報」二十五号〈第七巻付録〉平成二十年十二月）にも触れるところがあるが、水蔭著（典拠3）が視野に入っていないため、その前後の講談会の経緯に関する記述は少ない。

明治三十三年（一九〇〇） 庚子 二十八歳

三月 二十一日、大橋乙羽送別園遊会（於渋谷秋濤荘、午前十時開会）に出席した。発起人は坪谷水哉、尾崎紅葉、巖谷小波、江見水蔭、武内桂舟。出席者は、伯爵柳原義光はじめ八十余名に及んで、午後四時すぎに散会した。

【典拠】「大橋乙羽氏送別会」（『読売新聞』明治三十三年三月二十三日付・三面）

一昨廿一日午前十時より渋谷の秋濤荘に於て開かれたる乙羽氏送別の園遊会は十時過よりぼつ／＼会するもの発起者坪谷水哉、尾崎紅葉、巖谷小波、江見水蔭、武内桂舟氏を始めとし肝付兼行、小笠原長生、姉崎正治、上田敏、桐生悠々、佐々木信綱、戸川残花、大橋新太郎、塚原洪柿、水野年方、梶田半古、筒井年峯、岸上質軒、京の薬兵衛、遅塚麗水、石橋思案、柳川春葉、泉鏡花、角田竹冷、関如来、宮川春汀其他知名の士凡そ八十余名、庭の周囲には幕を打繞らし天麩羅、田楽、蝶螺の壺焼、ビイヤ等数十種の接待場あり盛んに爆竹を轟かして四時頃雨のそぼふる迄三々伍々打興ぜしが、肝付兼行氏の送別演説あり 両陛下皇太子殿下の万歳を三呼し続いて乙羽氏の万歳を三呼し余興に伯知の講談等ありて非常の盛会なりき

【注記】

「年譜」では、江見水蔭『自己明治文壇史』（博文館、昭和二年十月二十八日）に拠ったが、開会二日後の新聞報により、場所、時刻、発起人等を補った。発起人の水蔭は同書に六十三名の出席者を列記したあとに総勢「九十余名」としている。「年譜」もこれに従ったが、今回は内輪をとって新聞報の「八十余名」と直した。水蔭の挙げる六十三名の出席者のうち、紅葉門下では鏡花のほかに、柳川春葉、徳田秋聲の名が見え、武内桂舟の関係から画家も多い。

会場となった渋谷の秋濤荘は、町名地番を詳らかにしないが、水蔭著によれば「蓮門教主某の別邸——曾て紅葉が『紅白毒饅頭』のモデルに用ゐる掛けた——庭が非常に広く、何千坪からあるといふ評判で、一名化物屋敷と云はれてゐた」（圈点原文）という長田秋濤の当時の自邸で、その遠望の写真が「新小説」の臨時増刊「春鶯囀」（前記「小説口演会」の速記を収める）のグラビア頁に「長田秋濤氏と其住宅」として載っている。

蓮門教（正式名は神道大成附属蓮門教会）は、明治初期、豊前小倉の島村みつ創唱の日蓮宗を神道化した新興宗教で、十五年に上京、芝区田村町に総本院を構えて、一時は天理教、金光教と並ぶ教勢を誇ったが、淫祠邪教として「万朝報」を始めとする新聞各紙の批判攻撃を受け、教祖みつの死（三十七年）を契機に分裂して衰退し、後を絶った（以上、奥武則『蓮門教衰亡史——近代日本民衆宗教の行く末——』現代企画室、昭和六十三年三月十日、を参照）。

紅葉の「紅白毒饅頭」（『読売新聞』明治二十四年十月一日—十一月二十日／十二月六日—八日）発表のころは、蓮門教の発展期に当り、これを「玉蓮教会」とし、教会で信者の接待に出す紅白饅頭に因み、「毒」に邪教を諷する題名としている。鏡花の「紅葉先生の玄関番」（明治四十二年九月）では、本作連載の第十四回を横寺町で口述筆記した思い出が語られているし、同趣の記述が「山海評判記」（昭和四年七

月—十一月）の「半夜」の章、お李枝を前にした矢野誓の語りにも出てくるから、紅葉入門直後のよほど印象に残る体験だったとしてよい。

なお、大橋乙羽の送別宴はこれのみではなく、「文芸倶楽部」（六巻五編、明治三十三年四月十日）の時報の伝えるところでは、三井呉服店（於三友倶楽部、三月・日不明）、最好会（於鶯谷伊香保、三月二十五日）、博文館関係者（於高砂町福井樓、三月二十七日）、各々主催による三つの会があった。もって乙羽の交際の広さを窺うに足るだろう。

大正十三年（一九二四） 甲子 五十二歳

五月 十四日付「読売新聞」（五面）の「よみうり抄」に「泉鏡花氏 廿日頃中国筋内海方面へ出かけると」と報じられた。

二十四日、プラトン社と大阪朝日新聞社の後援を受け、すぐ夫人同伴で大阪に向かい、同日夜に大阪駅着、その後プラトン社本社を訪ね、社員の川口松太郎の案内で宗右衛門町の御茶屋に連れられ、社長中山豊三、小山内薫らと歓談した。谷崎潤一郎とも面会、旧交を温めたのち、梶原可吉を介し、当時帝室京都博物館で「北野天神縁起絵巻」と「平家納経」の模写に従っていた小村雪岱を呼び、滞在四日目の二十七日昼、雪岱とともに梅田から米子行きの列車に乗り、同日は城崎温泉に一泊、翌二十八日出雲をこころざした。この旅行には大阪朝日新聞社学芸部員春山武松が同行した。

六月 七日付「読売新聞」（五面）の「よみうり抄」に「泉鏡花氏 京都から帰京した」と報じられた。

【典拠1】「よみうり抄」（『読売新聞』大正十三年五月十四日付・五面）*引用を省略。

【典拠2】田中励儀「泉鏡花「玉造日記」考——自筆原稿から窺えること——」（『鏡花研

究」十二号、平成二十二年三月三十一日)

原稿の保存状態はきわめて良好で、「十六」「十七」を除いて、編集作業上の他者による書き入れはいっさい無い。(…)

「玉造日記」は、大正十三年五月、大阪に本社を持つ出版社プラトン社と大阪朝日新聞社の後援を受け、泉鏡花がすぐ夫人同伴で大阪・城崎・出雲を旅した紀行文である。作中から窺われる日程は、――五月二十四日朝東京駅を発ち、同日夜に大阪駅着。着いた晩を入れて四日間滞在し、折から帝室京都博物館で『平家納経』の模写に従事していた画家小村雪岱も誘って、二十七日昼の米子行列車に乗り込んだ。「玉造日記」は福知山線の武田尾駅あたりを走る車窓から武庫川の溪流を望むところで中絶するが、それを引き継ぐ形となった紀行文「城崎を憶ふ」によれば、その日は城崎温泉で一泊。翌二十八日には「松江まで行くつもり汽車」に乗る予定とされる。後に、山陰本線の途中駅鎧駅を舞台とした短編小説「鎧」(「写真報知」大14・2)が著されたことから、実際に玉造温泉までたどり着いたことと思われる。(…)

この他に、鏡花が大阪で会った人物に「『可』さん梶原と言ふ」「白木屋に於ける知人」(十七)がいる。本名梶原可吉。明治十六年神戸に生まれ、神戸電機の創業に尽力し常務取締役を経て大正九年六月に退社。その後、百貨店業界に転出した。

【典拠3】「よみうり抄」(「読売新聞」大正十三年六月七日付・五面) *引用を省略。

【注記】

「年譜」では、鏡花の「玉造日記」「城崎を憶ふ」と田中勳儀「解説」(岩波書店版『新編 泉鏡花集』第六巻、平成十五年十一月七日)に拠って記したが、その後、典拠2において、石川近代文学館蔵「玉造日記」の自筆原稿の詳細な解析が示されたので、この田中氏の論考に従って記述を訂正した。五月十四日と六月七日の

「よみうり抄」の記事は、「新たな項目」に記すべきだが、本旅行の出京と帰京とを報じた一連のものとして、本項訂正の前後に配した。

「玉造日記」の成立経緯については右論考に盡されているのだが、人物について触れられなかったところを多少補足しておく。

同行した春山武松(明治十八年七月十五日生、昭和三十七年八月二十二日歿、享年七十八)は姫路生れ、第一高等学校、東京帝国大学に学び、大正三年七月に哲学科(美学専修)を卒業、大正七年東京朝日新聞社へ客員として入社、翌八年大阪朝日新聞社に転じ、学芸部美術担当の記者となり、昭和十五年七月退職、その後十九年まで同紙に美術批評を寄せた。著書に『宗達と光琳』(美術叢書刊行会、大正五年三月五日)、『光悦と乾山』(同、大正六年三月二十五日)、勤務先の朝日新聞社から『法隆寺壁画』(昭和二十二年一月二十五日)、『日本上代絵画史』(昭和二十四年十二月二十五日)、『平安朝絵画史』(昭和二十五年十月三十日)、『日本中世絵画史』(昭和二十八年五月三十日)等がある。

梶原可吉は、水上瀧太郎の畏友。「峰茶屋心中」(大正六年四月)の主人公橋山檉一のモデルに措定される(田中勳儀「峰茶屋心中」の成立過程)『泉鏡花文学の成立』双文社出版、平成九年十一月二十八日)ほか、「芍薬の歌」(大正七年七月―十二月)にも、水上を擬した峰桐太郎の友人、神戸の「社長さん」として登場する人物である。米国留学中の水上瀧太郎が「三田文学」に寄せた「梶原可吉氏に」と前書のある短歌二十五首(「落書」「三田文学」大正二年十二月一日)の中には「汝が好む鏡花の筆の物語身に沁む秋をわれは旅寝す」「マルクスと鏡花をともにあげつらふその高声も心地よかりき」の詠が含まれており、両人の交友は鏡花への心酔を軸に結ばれたごくものである。

旅行に先立ち、この月十一日にプラトン社発行「苦楽」七月号掲載予定の「雨ふり」について、大阪の小山内薫宛に書簡を送ったことは「補訂Ⅵ」に記した。

「新たな項目」

明治三十年（一八九七） 丁酉 二十五歳

十一月 二十三日、第一回の「文学家美術家雑話会」（於上野精養軒、午前十時開会、午後四時散会カ）に出席した。来会者は九十余名、依田百川（学海）の演説があり、徳富蘇峰が、以後隔月に開催すべく委員の選出を提案し諒承された。

【典拠1】「文学家美術家雑話会」（「読売新聞」明治三十年十一月二十五日付・四画）

先頃の紙上に記載したる文学家美術家の雑話会は愈々一昨廿三日午前十一時より上野精養軒に於て開たり来会者は（…）諸氏九十八名にして開宴に臨み年長者依田百川氏の演説を為し続て徳富猪一郎氏は爾来本会を継続して隔月に一回宛相会合せん為め委員を撰定することを主張し孰れも之を賛成し夫より洋食の饗応あり三時過ぎ退散したりとぞ

【典拠2】「文学家美術家雑話会第一会」（「新小説」二年十三卷、明治三十年十二月五日）*「時報」欄。

兼てより文学家美術家及斯道篤士の間に於て計画せら「れ」つゝありし交遊会は去る十一月廿三日、新嘗祭の当日いよ／＼岡倉覚三、徳富猪一郎、都筑馨六、坪内雄蔵、黒田清輝氏等外十数名の発起に依り「雑話会」といへる名及「旧交を温め新知を広む」といへる目的を以て上野精養軒に開かれたり集るもの九十名

会は午前十時を以て開かれたり和画家、洋画家、新派洋画家、旧派洋画家、文学家、小説家、批評家、著述家、時文家、教育家、官吏、学士、紳士、記者、教授、歌人、俳家等一堂に充滿して握手、叩頭、十人十色、十色十秀、

此処に一団、彼処に一団、或は白馬会の技倆を評し或は美術協会の巧拙を品し或は徳富、都筑氏に迫りて英米魯独の山川を問ふものあり或は坪内、依田氏を囲んで戯曲を論ずるものあり其他桜痴居士を捉へて「時平公七笑」を質すもの露伴紅葉を拉して「新小説」「金色夜叉」を衝くもの放談高笑時の移るを覚え、やがて午餐の時刻となりぬ、洋服は和服と相交り有髯は無髯と相隣り卓を囲んで整然たり、酒三行、依田百川氏年長を以て本会の主旨を演説し次で徳富蘇峯氏本会を継続して隔月一回の会合をなし且つ次回の委員若干名を選定することを主張して異議なく通過し次で大橋乙羽氏は近衛公爵の本会に寄せられたる祝辞を朗読したり其都度拍手堂外に震ふ右午餐終りて再び雑話室に入る桜痴居士衆に要せられて一場の演説をなせり「音楽の必要」と題して縷々数千言諧謔諷刺の妙を極めて大に衆の喝采を博したり右演説終りて衆皆な退場して白馬会洋画展覧会絵画共進会及明治美術会展覧会等を回覧し隨意散会せり于時午后四時

次回は明年一月、帝国ホテルに於て開かるゝ筈なり

当日出席者氏名左の如し氏名の上に○印あるは今回の発起者にして△印あるは次回の委員に選定せられたる者なり

○岡倉覚三	△饗庭篁村	菱田春草	△大橋新太郎
高橋玉淵	野村文挙	内山正如	畔柳郁太郎
海野勝珉	下村歆山	△尾崎紅葉	大町桂月
望月金鳳	香川曄廣	田岡嶺雲	長谷川誠也
寺崎廣業	△橋本雅邦	島崎柳塙	本多天城
土井晚翠	濤川惣介	大出東皐	小堀鞆音
松野霞城	横山大観	△依田学海	△幸田露伴
西郷孤月	福地復一	広津柳浪	村田丹陵

△浅井忠	△柳原義光伯	△坪内雄蔵	△都筑馨六
大西祝	大野洒竹	佐々木信綱	小杉天外
泉鏡花	△○川端玉章	上田敏	△○徳富猪一郎
吉岡育	遅塚麗水	巖谷漣	岡田正美
△三宅雄次郎	幸田成友	梶田半古	福井江亭
高山林次郎	△姉崎正治	角田竹冷	半井桃水
笹川種郎	久保田米斎	川之辺一朝	△石橋忍月
△五十嵐光彰	坪谷善四郎	松本君平	吾妻健三郎
堀川利尚	合田清	石川光明	関如来
安藤伸太郎	落合直文	岡本甚吉	△久米桂一郎
水野年方	○岡崎雪聲	古川孝七	山田敬中
富岡永洗	野末嘉七	斎藤八三郎	鈴木得知
△福地源一郎	大橋豊次郎	下條正雄	△○大橋乙羽
端館紫川	△松井直吉	森篤次郎	△○高村光雲
△前田健二郎	尾形月耕		

【注記】

本会の第二回（明治三十一年一月三十日、於紅葉館）への出席は「年譜」に記載し、今回訂正追加した項目だが、その第一回への出席も確められたので新項目として加えた。典拠1は途中を省いたが、典拠2は会の景況に詳しく、出席者を列挙してあるため、全文を引用し、開会、散会の時刻もこれに従った。

このほか、内容に精粗はあるが、「東京朝日新聞」（明治三十年十一月二十五日付・二面）の「文学雑話会」、「早稲田文学」（七年三号、明治三十年十二月三日）の「文壇消息」、「太陽」（三巻二十四号、明治三十年十二月五日）の「文壇雑俎」等でも報じられている。

「明年一月」と予告された第二回は、帝国ホテルではなく、別項の通り、明治三十三年一月三十日に紅葉館で開催されたのである。

本会は、第二回があつてから一年後、明治三十二年一月二十九日に上野梅川樓で、福地桜痴、外山正一はじめ「斯道の篤志者七十余名」の出席を得て、その第三回が催されたとの新聞報（「文学家美術家雑話会の模様」「読売新聞」明治三十二年一月三十一日付・四面）があるが、「太陽」（五巻三号、同二月五日）の「海内彙報」では「会するもの数十名」、「帝国文学」（五巻第二、同二月十日）の「雑報」では「集るもの十余員」と出ており、初回、第二回ほどの盛会ではなかったようだ。「帝国文学」報は、福地、外山の他に、発起人として二條（基弘カ）、橋本（雅邦カ）の二名を挙げるが、出席者の詳細について調査が足りず、鏡花の出席を確められない。

明治三十三年（一九〇〇） 庚子 二十八歳

十二月 十三日、大阪金尾文淵堂内の薄田泣菫宛に手紙を出した。

【典拠】 薄田泣菫宛書簡・明治三十三年十二月十三日付の封筒（倉敷市編『倉敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 作家篇』八木書店、平成二十六年三月二十五日）

封筒のみ 毛筆

〔封筒表〕 大阪市東区南本町／心斎橋通文淵堂御内

薄田泣菫様／急候

〔封筒裏〕 東京市牛込南榎町

泉鏡花／十三日

〔発信局印〕 □□東京牛込 □・□・13〔判読不能〕

〔受信局印〕 撰津大阪 33・12・14〔判読不能〕

【注記】

以下、次項を除き、薄田泣菫宛の書簡は典拠の書による翻字をそのまま引用し

て、おのおの項目は別立てとする。

「年譜」にも記したが、鏡花は金尾文淵堂発行の「小天地」創刊号（明治三十三年十月一日）に「賛助員」として名を列ね、翌月号と翌年一月号にわたって「政談十二社」を発表している。封筒だけ残る本簡は「急候」の語からすると、掲載の迫った「政談十二社」（の第二回）に関わる内容であった公算が大きい。

なお、鏡花は翌三十四年一月十九日の正午過ぎに金尾文淵堂主人（種次郎）とともに横寺町の尾崎紅葉宅を訪れており（「十千万堂日録」同日の項。「年譜」に記載済み）、また「十千万堂日録」の同年四月二十三日には「春葉生、薄田泣菫氏を率て来る」ともある。

明治三十四年（一九〇一） 辛丑 二十九歳

四月（あるいは五月）カ 七日、薄田泣菫宛に、金尾文淵堂からの依頼原稿の進捗と『仇浪』（文禄堂刊）の広告に関する手紙（の下書カ）を書いた。

【典拠】 薄田泣菫宛書簡・明治三十四年四月あるいは五月の七日付（穴倉玉日「新資料紹介 泉鏡花筆 薄田泣菫宛書簡」「国文学 解釈と鑑賞」七十四巻九号、平成二十一年九月一日）＊翻字に付された数字・傍線を省く。

拝啓 まことに御無沙汰いくへにもおん
わび申候 このごろは毎日のやうに
雨にてうつとうしくござ候 つれづれの
をりから 飯鮎の画ときくとりいで
アノ爺さんの顔とあひ見ては一笑仕候
金尾君にさしあぐへき原稿あひを
くれすみ申さず しかし ゆだんなく 心

かけ候まゝ、しばらくおとりなし御計らひ
のほど願上候

さて甚た恐縮のいたりには候へども
「あたなみ」の広告 もう一度願ひたき

よし 横寺町申候 就ては

別にしたゝめ候 細腰帶酔

之図云々とそれに連名のなかへ

小生が加はり候まゝ、それとを御かきそへ駄裁

御みはからひの上 御差支之なくば平に御願申上候こ

のこととりいそぎ候まゝ用事はかり

後便萬縷敬具

七日

鏡花

泣菫兄

【注記】

本簡は泉鏡花記念館蔵。典拠の解説に「金尾文淵堂の編集者としての薄田泣菫との間に交わされた書簡」で「封筒がなく、さらに封筒に入れたと思しき折り目がないことから、何らかの形で持参されたものか、あるいは郵送された書簡の下書きと思われる」とある。詳しい内容の検討は右解説を参照されたいが、「飯鮎の画」の条など、次項六月九日付と推定される書簡と重なる部分がある。

明治三十四年（一九〇一） 辛丑 二十九歳

六月 九日カ、大坂の薄田泣菫宛に、金尾文淵堂発行「小天地」の感想、後藤宙外の近況などを書き送った。

【典拠】 薄田泣菫宛書簡・明治三十四年六月九日付（年月推定）（倉敷市編『倉敷市蔵

薄田泣菫宛書簡集 作家篇』八木書店、平成二十六年三月二十五日）

いかにもあの章魚は御傑作、しかし宙外君の許に御寄せありし猪苗代湖畔の図も極めて妙にて 編輯の田代先生なども習つたのだ〜と申をり候 またしば〜アノ章魚とおちさんにお目にかゝらねばならぬやう つれ〜の雨日毎に降りつゞき二三日来殊に強雨にござ候

まことに仰せの如くこのつゆのうつとうしさ何も出来申さず 小天地の分も心がけ 少しづゝはたらきをり候へども 延引いたしをり 貴兄に申訳これなく しかし近々の内に さしあげ候まゝ心齋ばし筋の若旦那が怒らぬやうに平に願上候 雑誌も一号一号おん見事 今めかしきことながら御骨折のほどおん察し申上候 紫日記拝見お目にかゝりおんはなし承り候やうに覚えおなつかしくござ候 その紫の江戸にお遊の日記も追つていで申すべく候 矢来の夜に臆病風を吹かし大ステッキをついて柳川君に送られなすつたことおんしるしもなくば卑怯と存じ候

見たいのは千日前のはげものやしき 紀の国の章魚、それから君のいろをんな、この度御引越さき（ゆき江）と優しき名相見え申候まゝお案じ申候 艶福御警戒なさるべく、こなた同人皆たつしや 宙外君は例に因つて 三日の夜より編輯にみえ申候 手すきの時は肱枕をして煙草をのみながらおうはさなど申をり候 写真は一枚とり申候まゝ 出来次第さしあげ申候 写真といへば此の間若旦那ワザ〜おはがきにて此号の先生の写真につき、其の二字ぬけたがあるよし わざ〜御申越その旨申候 御念に及ばずと御きづかひなさらぬやう御鳳声願上候

後便可尽縷 敬具

九日

鏡太郎

【注記】

前項にも記したように、本簡は、四月あるいは五月の七日付の書簡（下書カ）とほぼ同じ内容を含み、さらに「小天地」六月号の内容についての感想を書き送ったものである。文中の語句については、典拠の書の注に詳しいが、注の付いていない箇所を補えば、「編輯の田代先生」は、当時鏡花、宙外らとともに「新小説」の編輯局員だった画家の田代曉斎のこと。大野静方『浮世絵と版画』（大東出版社、昭和十七年一月二十日）の「浮世絵師列伝」には、河鍋曉斎の門人として「本姓田代英虎、柳澤文真及武内桂舟門人、信州の人、東京住、明治十一年生。」と出ているが、歿年は不明。曉斎、桂舟二人の師の号を享けたのである。鏡花との関係では、春陽堂刊『通夜物語』の扉絵、「新小説」掲載「註文帳」「袖屏風」の口絵、「やまと新聞」掲載「婦系図」「沈鐘」の挿絵などを担当している。

前項と併せて、このころ「小天地」を編輯していた泣菫との交流の密であったことが窺える内容である。

明治三十五年（一九〇二） 壬寅 三十歳

十月 六日、上野池ノ端無極亭へ赴き、先着していた尾崎紅葉とともに、市川久女八（九女八、久米ハトモ）主宰の第二回女子演芸会（正午開始）を見物した。二人の姿を目にした正宗白鳥によれば、当日は坪内逍遙、徳田（近松）秋江、幸堂得知らも来合せていたという。

【典拠1】 正宗白鳥「文芸時評 尾崎紅葉について」（『中央公論』四十一年十一月、

大正十五年十一月一日。のち『文芸評論』改造社、昭和二年一月十日、に収録）＊引

用は初出。

三度目に、私が紅葉を見たのは、池ノ端の無極亭で、久米八門下の踊りの会のあった時であった。私は徳田秋江君など、一しよに出掛けて、坪内博士の

はとりで見物してゐたが、その会へは紅葉山人も来てゐて幸堂得知翁と並んで話をしてゐた。そこへ遅れ馳せに鏡花氏がやって来たが、座席の斡旋をしてゐた中年の女が、「先生のお側へいらつしやい」と云ふと氏は礼儀正しくもそちらへ寄つて行つた。私などのやうに、先生の側で胡坐を掻いたりなんかしなかつた。間が隔たつてゐるので彼等の話声はよく聞えなかつたが、たゞ、紅葉が鏡花氏に向つて、「お前が……」と云つてゐるのが耳に留つた。そして、話は聞えなくても、両氏の態度を見てゐるだけで、師弟対座の光景が映画の如く浮んだ。一人が師の態度を崩さなければ、他の一人も弟子の態度を破らなかつた。「青葡萄」に書かれてゐる師弟関係が思出された。

【典拠2】「演芸節用」(東京朝日新聞)明治三十五年十月五日付・四面

久女八一派の女子演芸会の第二回目は明六日正午より下谷の無極亭にて催す
由当日の番組は

相摸海士(市川葉翠、同のしほ) 手習子(小川みよ子) 鷺娘(藤木よね)
三つ面(阪東玉三郎) 沼津(竹本紫行) 安宅の関及び枕獅子(市川久女八)
出囃子(六郷社中)

【典拠3】「演芸界」(日出国新聞)明治三十五年十月八日付・三面

久女八一派の女子演芸会は一昨日午後下谷の無極亭に於て開きたるが当日は
尾崎紅葉外数名の文士連連立ちて見物し斯道改良の点に付き二三注意を与
へたりとぞ、尚第三回目は来月上旬開会の筈にて今回は久女八が多年研究
しつゝある長唄『賤機帯』の振の型を後進者に伝へんとて演ずる由

【注記】

典拠1の正宗白鳥の回想をもとに、新聞報を調査したところ、「日出国新聞」に
尾崎紅葉観覧の記事を見出したので立項した。

女子演芸会に関する記事を継続的に掲げ、消息を伝えているのは典拠2に引い

た「東京朝日新聞」だが、紅葉来会を報じたのは、市内各紙のうち「日出国新聞」と、ほぼ同じ文面の同日付「毎日新聞」(三面)のみである。

女子演芸会の発足は「時事新報」(六月十三日付・四面)に「専ら演芸の改良を図り其傍^{かたはら}広く需めに応じて出教授又は宴席に出演する筈」と報じられたのが最も早く、続いて「日出国新聞」(六月十五日付・三面)には、さらに詳しく、

今回二三の人々の發起にて下谷池の端弁天前の無極亭に仮事務所を設立し斯道の大改良を計るよし会員は五種に分ち名譽、特別(一時五円以上を維持費として納めしもの)賛助(男子にして趣意を賛成し一ヶ年二円を出金したるもの)正(女子にして会費一ヶ年二円を出金せしもの)通常(男女に拘らず会員の紹介で当日限り入会のもの)等にて当分の内二ヶ月に一回催す筈にて即ち第一回興行は来る二十二日正午無極亭にて開会する筈なり

とあり、第一回公演後の同紙六月二十七日付(同)では「組織後間もなく既に二百余名の会員を得たる由にて第二回は近日上野の梅川樓にて催す筈なり」と報じられたが、十月まで延期となつたのである。

その後の「東京朝日新聞」をたどると、第三回が十一月十六日と報じられたものの、久女八の前橋巡業からの帰京が遅れて同二十九日に延期となり、これも延びて十二月五、六日と告知されたが、ついに実現しないまま終つた。

会場となつた無極亭のものは知名の蕎麥店の無極庵である。文政七年二月刊『江戸買物独案内』(中川芳山堂撰)「飲食之部」の「御膳蕎麥」に「上野仁王門前町 無極庵」主人「河内屋瀬平」と出ている。明治二十二年十月から数か月間、その隣に下宿したことのある正岡子規「筆まかせ」(表題「筆まかせ」)第一編、同年の項の「書生臭気、三区の比較」に、「我寓の南隣は新築にかゝる無極庵にて、安直なる書生の懇親会の会場なり。」と記されているが、二十五年十月十四日付「読売新聞」(四面)の「上野池の端無極庵 小川瀬平」名義の広告には、

弊店従来御愛顧之程難有厚御礼申述候然る処近年拙者並家族共平素疾病勝にて業務に堪兼候に付今般廢業仕候間是迄御愛顧之諸君様は弁天前小憩所無極亭へ不相替御光来御休憩奉希上候

但拙者へ御用之御方も同所へ御尋被下度候

とあり、無極庵とは別に「小憩所無極亭」があり、爾後無極庵を廢業し、無極亭のみ營業を続けるむねの告知であることが判る。

柳原極堂は『友人子規』（博文堂書房、昭和二十六年十二月二十日三版）で、子規のかつての下宿を探索した結果、「無極庵は前記の無極亭のことである。後年營業上の都合で庵名を廢して亭に改めたといふことである」としているが、先の新聞広告に照せば、無極庵と無極亭の併存していたことは明らかであり、店名を改めたのではなく、二十五年十月に両者のうち江戸以来の蕎麥店無極庵を廢し、無極亭が残って小憩所貸席の業を続けたというのが正しいように思う。

無極亭は明治三十一年五月一日に改築し開席祝をしているが、久女八はこの祝賀に「近江のお兼」を踊っている（上野の無極亭）「東京朝日新聞」同年四月三十日付・四面）。第二回で「手習子」を踊った小川みよ子（巳代子）は、第一回のおりの評（「女子演芸会」）「東京朝日新聞」明治三十五年六月二十五日付・四面）に「小川巳代子（無極亭の娘）大體なれど年は十歳なりとか九女八仕込にてキリ、としたる踊振なり」とある。仮事務所と会場が無極亭になったのは如上の縁からであろう。

なお、永井良知編『東京百事便』（三三文房、明治二十三年七月九日）の「無極庵」の項には、同店に「三つの名物あり」として、

一は東叡山の開山なる天海僧正此家の号を名づけたる無極の二字を大久保彦左衛門が筆せる偏額にして古色最も愛すべく二は蕎麥「麥」にして此は三百年來伝来の特色なるものた「に」て三は娘「みつ」女の手踊なり尤も初と終りのものとは主人之を秘藏し居れとも第二の蕎麥「麥」は客の求によりて進むるなり

との紹介がある。もって「手踊」は無極庵小川家代々の芸事だったことになる。典拠1の引用部分の前には、白鳥が紅葉を見た最初は、早稲田卒業（明治三十四年七月）の直後、高田早苗、坪内逍遙とともに牛込明進軒での会食のおり、二度目は牛込赤城下清風亭で「高等講談」（の二回目か三回目）のおりであった、と述べている。「高等講談」の会は、別記「小説口演会」（改良講談会）「文学者講談会」（トモ）のことと思われるが、この会の開催は明治三十二年末から三十三年にかけてであり、白鳥の回想する順序にはなお一考の余地がある。

市川久女八と鏡花との関係については、この年十月十三日よりの新富座興行「十三間堂棟由來」で「おりう」役をする久女八から演出の助言を求められた件を「補訂」に記した。久女八に助言を与えたのは師の紅葉ばかりではなかったのである。上野無極亭へ見物に赴いた十月六日は、あたかも「読売新聞」を退社した尾崎紅葉の「二六新報」入社の辞が同紙一面に載った日であった。

明治三十五年（一九〇二） 壬寅 三十歳

十月 七日付「都新聞」（三面）の芸妓消息「お神楽だより」に、神楽坂薦永楽家の桃太郎（伊藤すず）の近況が報じられた。

明治三十六年（一九〇三） 癸卯 三十一歳

二月 八日付「都新聞」（三面）の芸妓消息「お神楽だより」に、神楽坂薦永楽家の桃太郎の近況が報じられた。

明治三十七年（一九〇四） 甲辰 三十二歳

一月 五日付「都新聞」（三面）の「吉原其他各所の三ヶ日」中「神楽坂」の項の「景気好かりし」芸妓のうちに「薦永楽桃太郎」の名があった。

三月 十三日付「都新聞」（三面）の芸妓消息「お神楽だより」に、神楽坂薦永楽家の桃太郎の風聞が報じられた。

【典拠1】「お神楽だより」(「都新聞」明治三十五年十月七日付・三面)

▲鳶永楽家の抱妓桃太郎(伊藤すゞ^二)は親兄弟も親戚もなく一人ポツチの因果の身情願ハヤ右や左のお旦那さま憐れの者やと思し召し後生心のお手の内祝儀をタンと下されませとお座敷で盲の仮声を使つた訳でもあるまいが日本橋橋町の綿問屋何とやら云ふ若旦那が落籍「籍」をして遣らうと交渉を始めたが桃太郎は鬼が島へでも行く心算可厭だと陀々を捏ねて居る

【典拠2】「お神楽だより」(「都新聞」明治三十六年二月八日付・三面)

▲鳶永楽家の桃太郎(廿^一)は同所の西洋料理青陽樓へ出掛け球突の稽古を押始めたのでイヤお神楽は吐月峯に縁のある土地だけに物騒な奴が飛出すわいと驚いて居る者もあるがその実玉のレースから棕鳥を占めて遣らうとの目算だと分つて見れば別段玉蹴るにも及ばじ

【典拠3】「吉原其他各所の三ヶ日」(「都新聞」明治三十七年一月五日付・三面)

不景氣の声は例年の如くなれど此年は又格別の不印と泣きを云ふ中にも大晦日を明しては人々の氣も新まりて屠蘇機嫌で新柳さては吉原洲崎と浮れ込むなど愈よ陽氣となり殊に長閑な好天気続きなれば二日の初荷の声勇ましく崩れ込むもありて上野山下附近を始め浅草公園の遊観場と至る処好景氣を呈したり(…)▲神楽坂 同所拍子大小百二十三人ありて三日間の玉数は千五百七十中にも景氣の好かりしは新松葉小米仇吉、相摸屋一二三、長平、福相模万作、鳶永楽桃太郎、同五郎、松葉屋千代松、万武蔵小さん、料理屋では末吉、常磐、吉熊、待合では楓月、一力、稲本等なり

【典拠4】「お神楽だより」(「都新聞」明治三十七年三月十三日付・三面)

▲鳶永楽家桃太郎(二^七)は四谷南伊賀町の山田実(七^二)と云ふ銀行員を引掛けハイ手前だけでは何時も山田が実です先づ当分は饑饉もござんすまいと澄まして居る

【注記】

「都新聞」の三面は、周知の通り花柳界の風聞艶種に詳しく、随時市内各所(含横浜)の芸妓の消息(四十一年以降、写真が加わる)を載せているが、うち桃太郎(伊藤すゞ)関係の記事四種をまとめて掲げた。

典拠1は、文面からしておそらく桃太郎に関する初めての紹介記事だと思われるが、父は不明、伊藤かまの私生児であるすゞの生年月日は、明治十四年九月二十八日(荒川法勝『泉鏡花伝 生涯と作品』昭和図書出版、昭和五十九年七月二十日、に翻刻されたすゞの戸籍の記載による。これについては「補訂」に記した)であるから、年齢は「二十」ではなく当年「二十二」歳である。雑司ヶ谷霊園の墓碑銘には、母かまが明治三十年九月四日歿、祖母やすが三十一年七月三十一日歿と刻されているので、「親兄弟も親戚もなく一人ポツチ」であったことは間違いない。すゞが鏡花と出会ったとされる明治三十二年は祖母逝去の翌年、「親も兄弟も叔父叔母もない」「あはれな孤児」の数寄屋町の芸妓蝶吉が登場する「湯島詣」は同年十二月の作である。典拠2では一つ取って「廿一」だが、三十七年の典拠4では「二十」に戻ってしまっている。

桃太郎の身を置く「鳶永楽」は、牛込区神楽町三丁目二番地にあった芸妓屋、主人は石井カネである(「新撰東京名所図会」第四十一編「牛込区の部上」東陽堂、明治三十七年一月二十五日、に拠る)。牛込神楽坂の花街は、醉多道士『東京妓情』(東生亀治郎、明治十六年十月)の「東京平康等級表」(巻之上)では、深川、本石町とともに「四等」地とされ、坂上の毘沙門天善國寺を中心に、坂の両側の裏手一円をいうが、東方の坂下から上へ左右に神楽町一―三丁目の順で善國寺に至り、西方の坂上に向って二丁目の左手に鏡花の自宅(二十二番地。三十六年一月に牛込南横町から転居)、三丁目の右手に鳶永楽があった。

四種の記事より時期は下るが、明治三十九年十一月の時点で、「芸妓は東京府下

に三千二百七十三人あり内三百六十三人は半玉なり」とされ、各区のうち「牛込区は百三十三人（内御酌十二人）芸妓屋五十七軒」との報告がある（現在の花柳界図）「都新聞」明治三十九年十一月二十日付・五面）。典拠3の「百二十三三人」とほとんど違ってはいない。

典拠2に出る青陽樓は、神楽町三丁目六番地にあった林栄次郎経営の店で、岩戸町二十四番地の明進軒とともに牛込の西洋料理屋として知られていた（同前「新撰東京名所図会」および『東京案内』読売新聞社、明治三十九年五月二十八日、による）。
葛永楽とは咫尺の間である。

典拠1・4には、具体的に桃太郎の最真客のことが出てくるが、これらの記事
を鏡花はどのような思いで読んだのであろうか。

なお、のちの近事画報社発行「美観画報」（一卷三号、明治三十九年三月五日）の「桃づくし」には、市内各所の「桃」の名をもつ芸妓十五名が列挙されているが、うち八番目に「牛込 葛永楽 桃太郎 中村きさ 同（明治）廿一年五月生」との記載がある。おそらく、この七つ年下の「中村きさ」が伊藤すずの引いた後に「桃太郎」を継いだ妓であらう。三十九年は二度目の逗子滞在が始まって二年目である。逗子滞在期の代表作「婦系図」のもと柳橋の芸妓「お葛（葛吉）」の命名が、桃太郎の身を置いていた「葛永楽」に因むものであることはいままでもない。

なおまた、葛永楽が三十九年十二月三十日の神楽町の大火で町内一帯の他の芸妓屋九軒とともに全焼したことは、すずとの出会いの検討も含めて、拙稿「鏡花「年譜」上の存疑」（泉鏡花研究会編『論集泉鏡花』第五集、和泉書院、平成二十三年九月二十日）に記した。

これまで伊藤すずの芸妓時代については、長谷川時雨「明治美人伝（三十六）泉すゞ子下」（『読売新聞』大正二年八月十日付・五面）に「廓で仕込まれただけあつて花柳派の踊りを、自分でも許してゐるほどである」との言葉がある程度で、語

られること少なかった。邦枝完二『恋あやめ』（朝日新聞社、昭和二十八年十二月二十日）や松本清張「葉花星宿」（『文豪』文芸春秋、昭和四十九年十月三十日）、竹田真砂子「鏡花幻想」（講談社、平成元年三月十日）等、創作中の記述はひとまず措くとしても、すず夫人と晩年をともに過した嗣子泉名月氏の証言が限られているため、村松定孝氏『泉鏡花』（寧楽書房、昭和四十一年四月十五日）に収められた同業畑井つる女からの聞書に「品は悪くなかったが、どちかたといえ、むっつり型で、お座敷は冴えなかったという」（『婦系図』の虚構の意味―畑井つる女の聞書に基づく事実の解明― 傍点原文）とあるのに従って、その像がかたちづくられてきた。同氏『おぢさゝ供養頌』（新潮社、昭和六十三年六月五日）の「柳暗花明への招待」でも、同様の記述が重ねられている（上記二書に芸妓屋の名を「葛永楽」としているのは誤り。『恋あやめ』『鏡花幻想』には「葛永楽」とある）。

しかし、如上「都新聞」の四種の記事に就くかぎり、おりおり複数の華客との風聞が立つほどの妓であり、とりわけ典拠3によれば、明治三十七年当時の神楽坂芸妓百二十三人のうちでも相応に御座敷での人気のあったことが窺えよう。

したがって、「湯島詣」の蝶吉（教寄屋町）、「起誓文」「舞の袖」のお静（日本橋檜物町）、「婦系図」のお葛（柳橋）、各々の神楽坂より格上の花街の芸妓を登場させた造型の理想化が甚だしい点は動かしがたいとしても、従来の「むっつり型で、お座敷は冴えなかった」という印象は修正されてよいのではないか。

今後とも芸妓桃太郎に関しては、さらなる調査を続ける必要がある。

明治三十七年（一九〇四） 甲辰 三十二歳

八月二十五日、国民書院より鏡花作「留守宅見舞」等を収める『三尺剣』が刊行された。巻末に「泉鏡花新作」「鏑木清方口絵」の『式部小路』の近刊予告が載ったが、国民書院からは刊行されず、四十年一月に隆文

館からの刊行となった。

【典拠】 国民書院広告（『三尺剣』明治三十七年八月二十五日）

式部小路	
泉鏡花新作	近刊
楠木清方口繪	
これ特に作者が稿を起せるもの、天來の想を飾るの筆は絢爛花の如く、輕妙神の如き奇才は天馬の空を行くに似たり、銳利にして刃の如く、才華燦として星をあざむく、これ作者獨特の枝なり、此書また近來の一大傑作、蓋し文壇の珍たるを失はず、恐らくは一讀卷を擱く能はざらむ。	
發行所 國民書院 <small>東京市小島區川島十丁</small>	

【注記】

すでに須田千里「単行本書誌」（岩波書店版『新編 泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日）に記載があるにもかかわらず、見逃していたため、補った。

国民書院の発行人原口豊秋は、尾崎紅葉晩年の門人。紅葉の「十千万堂日録」によれば、明治三十四年七月二十一日に原口天々の名で入門を乞うたのち、三十一日にこれを許され、出身地鴻巣にちなみ春鴻の号を与えられた。鏡花斜汀兄弟とも親しく、翌三十五年夏の最初の返子滞在に同行、神楽町の家へもよく出入りし「草あやめ」（明治三十六年七月）に「姓は原口、名は秋さん、呼んで女形といふ様子の可いの」云々と出てくる。桂太郎の女婿で代議士だった長島隆二の末弟だが、生歿年は未詳である。

国民書院の刊行書は、国立国会図書館所蔵本では、三十八年二月二十八日刊の

蜷川新訳『比斯麥が夫人に与ふるの書』（表紙には「ビスマルク普仏戦争軍中書翰」とある）が最後であるから、未刊のまま隆文館がこれを引継いだものと思われる。隆文館版は、広告と同じく楠木清方の装丁と口絵（多色刷コロタイプ）で刊行された。なお「単行本書誌」には記載されていないが、『式部小路』には、柳色の地の右側に柳の葉、左上の書名の下に杯と花卉を配したカバーが付いている（『アンダーグラウンド・ブック・カフェ 地下室の古書展Vol.9』目録（刊行年月日記載なし。会期・平成十九年五月二十七日―二十九日、於東京古書会館）の森井書店出品の写真版による）。

明治三十八年（一九〇五） 乙巳 三十三歳

七月 八日、備中国浅口郡連島村在の薄田泣菫宛（絵葉書）に、泣菫作「花売女」へ鈴木鼓村が曲付けした箏曲の感想を書き送った。

【典拠】 薄田泣菫宛葉書・明治三十八年七月八日付（倉敷市編『倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡集 作家篇』八木書店、平成二十六年三月二十五日）

絵葉書（多摩川上流 UPER PART OF TAMAGAWA）毛筆

【受信者】 備中国浅口郡連島村

薄田泣菫様

【発信者】 東京牛込神楽町二ノ二二

八日／泉鏡太郎

【発信局印】 牛込 □・7・□【判読不能】

【受信局印】 備中西ノ浦 38・7・10 イ便

今朝鼓村氏の一曲貴兄の花売女拝聴 朝霧を分け行く姿、京の町も、目さきにあらはれ、千種の花をかこにしての処、ぞつとするほどうれしく存じ候

【注記】

宛先の「備中国浅口郡連島村」（現、岡山県倉敷市。明治四十五年に連島町となり、

昭和二十八年倉敷市に編入は泣董の郷里。

箏曲家の鈴木鼓村（明治八年九月九日生、昭和六年三月十二日歿。享年五十七）は本名映雄。雨田光平編『鼓村襟記』（古賀書店、昭和二十九年二月二十五日）の蒲原有明の長文の序「鼓村のおもかげ」によれば、鼓村の号は生地磐城国巨理郡小鼓村に因む、という。同書巻末の「鼓村著作物年表」には、泣董の詩に曲を付けたものとして、「大原女」（明治三十五年十月）、「花売女」（三十六年六月）、「海女」（同九月）、「紅梅」（三十七年二月）、「待ち心」（三十九年六月）等が挙げられているほか、与謝野晶子、蒲原有明、相馬御風の詩に曲を付けたものがある。

鼓村はまた明治四十一年六月以降に始まった愛読者の集い「鏡花会」の一員であり、鏡花の序のある『怪談会』（柏舎書樓、明治四十二年十月二十八日）にも「二面の箏」「雲の透く袖」「狸問答」の三篇を寄せている。吉原仲の町の引手茶屋「鳶屋」で催された「怪談の会」を舞台とする鏡花作「吉原新話」（明治四十四年三月）の三章に出る「描ける花和尚宛然の大入道、此の人ばかりは太ッ腹の、あぶらばてりで、宵からの大肌脱」の「有名な琴の師匠」は、鼓村を写した人物といわれる。

明治四十二年（一九〇二） 己酉 三十七歳

一月 一日、春陽堂より後藤宙外 of 作品集『裾野』（上下二冊帙入）が刊行された。宙外はこれに署名して鏡花に献呈した。

【典拠】 神田古書店連盟編刊『特選古書即売展出品目録』（刊行年月日記載なし）

*会期・平成二十六年十月二十四日―二十六日、会場・東京古書会館。かわほり堂出品の写真版。写真の引用を省き、キャプションのみを記し、算用数字を漢数字に改める。

16 裾野 後藤宙外 二分冊 初函 泉鏡花宛墨筆署名 美 各巻木版口絵

／英朋 明42 二八〇、〇〇〇円

【注記】

引用を省いた写真版によると「贈 鏡花兄」の下に「弟 宙外生」の署名が見える。宙外は慶応二年十二月二十三日生れ、鏡花よりは七歳の年長である。

『裾野』は宙外の単著としては九冊目（『新小説』の別刷本『闇のうつつ』明治三十年九月二十六日、を入れると十冊目）のもので、前篇中扉に「この書を 恩師 坪内逍遙先生の座右に呈す」との献辞が印刷されている。前篇後篇ともに鱗崎英朋画の色刷木版口絵（前篇・折込、後篇・一頁大）を付すが、奥附は後篇のみにある。当時の「新小説」等の広告では「函入」といわず、「帙入」と称している。

内容は「東京朝日新聞」（明治四十二年一月十二日付・六面）に、

前編には明治廿五年の作狂美人以下同卅七年八月の作門田の里に至る十篇を、後編には同年十二月の作比目の波以下同四十年十一月の作悲しき矛盾に至る十一篇を収めたり宙外の小説の書きぶりは会話よりは叙事に精しく客観叙法よりは主観叙法に特色あるを認む急転直下溪廻り山転ずるの妙味は乏しけれど局面の変化は可なり人をしして巻を措くに忍びざらしむるものあり文壇の注意を惹くに足るべき書たるは疑を容れず

とあるのに盡される。

なお鏡花は明治三十五年に宙外著『めぐる泡』（春陽堂、五月十五日刊）へ序文を寄せている。

明治四十三年（一九一〇） 庚戌 三十八歳

九月 十五日より三十日まで、浅草三友館で映画「辰巳巷談」（製作吉沢商店）が上映された。出演は、木下吉之助、五味国太郎、木村操、関根達彦ほか（監督等不明）。

【典拠1】 日本映画史研究会編『日本映画作品辞典・戦前篇』第Ⅱ巻（科学書院、

平成八年五月二十五日）＊原文は横書き。算用数字を漢数字に改める。

辰巳巷談

ジャンル…新派劇

製作会社…吉沢商店

封切年…一九一〇年 封切日…九月一日 封切場所…三友館

主演…木下吉之助、五味国太郎

【典拠2】「遊覧案内」（都新聞）明治四十三年九月十六日付・四画

九月十五日開演
寫眞全部取替
淺草三友館電話下谷
公園三三七二
辰巳巷談
木下吉之助 五味国太郎
木村 操 關根 達發
喜劇「お互様」木下吉之助、外一座
喜劇「田宮坊太」木下吉之助、外一座
喜劇「オラマ」米國紐育市の實況
電氣併合踊（和音）其他新輸入
踊り併合踊（樂合奏）寫眞數種

【典拠3】「しばあとゆうげい」（都新聞）明治四十三年十月一日付・三面

▲活動写真 公園電氣館は一日より不如帰、芝浜の革財布、悲劇良心、氣拔けのマッリス、全国学生大競走会▲三友館 悲劇兄弟、喜劇ハイカラ乎バンカラ乎、鎌倉山、電氣踊、浮かれ絵姿、キ子オラマ合衆国、紐育市の実況▲オペラ館 実物応用露子、正直小僧、フレデリック戦史▲美音館 江戸房、弥次喜多、三千歳

【注記】

典拠1の記載をもとに、当時の新聞広告により上演を確認することができた。典拠1の出演者は二名だが、新聞広告では四名が挙げられており、現在までに判明している「辰巳巷談」の映画化は、これのみである。

鏡花作品の映画化は、本四十二年より始まり、四月の「通夜物語」（美音館封切、

「女の意地」として上映）、五月の「瀧の白糸」（富士館・三友館封切）、いずれも吉沢商店の製作にかかり、同社の作品が六月まで三つ続いたことになる。

映画化にこの三作が選ばれた理由は、「通夜物語」「瀧の白糸」「辰巳巷談」が明治期の新派の舞台における「鏡花もの」の上演回数首位から三位までを占める演目だからであり、当時の活動写真の上映は舞台で当りをとった狂言を新派俳優の出演によって手早く撮影し、これに役者の声色の巧い弁士を入れてする興行だったことに因るのである。

したがって演者の四人は、いずれも新派の中堅どころの役者だが、以下に各種の俳優名鑑『日本俳優鑑』演芸画報社、明治四十三年三月一日／『現代俳優録』演芸倶楽部「三巻一号附録、大正三年一月一日／『現代俳優鑑』演芸画報社、大正七年三月二十日／高澤初風『現代演劇総覧』文星社、大正七年十二月二十日／『新演芸臨時増刊 役者の素顔』大正八年六月十日）および田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』（中央公論社、昭和五十二年二月二十日）を参酌して経歴を略述し、各々末尾に「鏡花もの」へのおもな出演を記しておく。

木下吉之助（明治八年六月二十五日、東京京橋生れ）は、明治二十八年角藤定憲一座に入って市村座の「二人狂」に仕出しの女形を勤めたのが初舞台で、大阪の成美団にも加わり、可憐な若女形として人気を博して、「不如帰」の浪子、「女夫波」の敏子、「乳姉妹」の君江等を得意とし、吉沢商店の映画では常に五味国太郎の相手役を勤めた。「風流線」（明治四十年七月・本郷座）の巨山美樹子、「三味線堀」（四十四年三月・宮戸座）の笹川お雪、大正に入って連鎖劇「瀧の白糸」（大正六年四月・本郷座）の白糸、同じく「心中女夫星」（「湯島詣」の改作、七年七月・同）の芸妓国香、等がある。

五味国太郎（明治八年一月八日、野州烏山生れ、大正十一年四月二十八日歿）は、はじめ武知元良一座に入り、のち高田実の門下となり、川上音二郎一座にも加わって、

明治四十年五月本郷座の「松風村雨」の北浦乙哉で名題昇進となった（新派の名題昇進の嚆矢という）。大正期は宮戸座に拠り、柴田善太郎と組んで定期興行し、「不如帰」の片岡中將、「潮」の野々宮岩五郎等の当り役をもっていた。吉沢商店への参加以降は、大正二年に日活、五年に天活（天然色活動写真）、八年に国活（国際活映）、九年に松竹キネマ、と次々に新興する映画会社を渡ったのち、十年に舞台へ復帰したが、十一年大阪公演中に倒れた。「風流線」（前出）では一番槍の力松、「三味線堀」（前出）では子分種吉を演じた。

木村操（明治十三年一月一日、大阪高津生れ）は、本名庄之亮。明治三十二年林美佐男を名乗って劇界に入り、三十四年八月広島寿座で木村操と改名して「瀧の白糸」の妹役を勤め、立女形の實力を認められて上京後、三十八年伊井蓉峰一座に入り、その相手の娘役を出色としたが、伊井が明治座に拠った時、離れて大阪に赴き浪花座「百合子」劇のお苦を演じて人気を誇った。「つや物語」（明治四十年一月・新富座）の篠山澄子、「婦系図」（四十一年九月・同）の酒井妙子、「南地心中」（四十五年五月・同）のお美津、晩年には「新版つや物語」（川口松太郎脚色、昭和十一年五月・明治座）の玉川清祖母しげ子、等がある。

関根達彦（明治十六年一月十四日、東京下谷金杉生れ、昭和三年三月二十日歿）は、本名橘太郎。明治三十四年伊井蓉峰の内弟子となったが、三十七年大阪朝日座加入、翌年高田実の門下となり、三十九年高田に従って上京、本郷座に出演、老役を得意とする一方、四十二年五月エム・パター商会製作の軍事劇映画「日本桜」に初出演、同年十二月吉沢商店目黒撮影所内に開設した俳優養成所では、藤澤浅二郎とともにこれを指導、養成所で育った女形立花貞二郎とともに「カチューシャ」（日活向島、大正三年十月）に主演して世に知られ、五味同様、日活のあと天活、松竹キネマ、帝国キネマを渡り、長軀（五尺四寸）を活かしてカメラの前に立ち、最後を京都のマキノプロダクションで終えた。「鏡花もの」では、野外劇「紅玉」

（大正二年十一月）の老紳士、「辰巳巷談」（八年七月・神田劇場）では船頭宗平、等を勤めている。

大正五年（一九一六） 丙辰 四十四歳

九月 三十日付「読売新聞」（七面）の「よみうり抄」に「泉鏡花氏は近隣の悪疫を避けて本郷千章館に在りしが数日前帰宅せり」と報じられた。

十一月 一日発行の「文章倶楽部」（第一巻第七号）の「文壇風聞記」に、近所のコレラの発生に「夢中で逃げ出して本郷の方に下宿したが、家人は然うとは知らず、突然の行方不明に、此方が非常の恐慌だったといふ」と報じられた。

【典拠1】「よみうり抄」（「読売新聞」大正五年九月三十日付・七面）*引用を省略。

【典拠2】「文壇風聞記」（「文章倶楽部」一巻七号、大正五年十一月一日）

今度のコレラで、一番恐慌を感じたのは、文壇第一の神経家泉・鏡・花・氏で、近所にコレラが発生すると、もう一時もじつとしてゐられない。夢中で逃げ出して本郷の方に下宿したが、家人は然うとは知らず、突然の行方不明に、此方が非常の恐慌だったといふ。

【典拠3】「年譜」（改造社版「現代日本文学全集」十四篇『泉鏡花集』昭和三年九月一日）

大正五年十月、水上瀧太郎氏英国より帰る。此の年、初夏のはじめより、あしき病流行したるに恐をなし、門を出でざること、殆ど三月。

【注記】

典拠2は、「補訂（十四）」の大正九年七月十二日の項の注記に引用ずみのものだが、今回典拠1の大正五年九月の「よみうり抄」の報と記述の一致することが判ったので、あらためて本文へ組入れた。

「よみうり抄」や「文壇風聞記」の記事が正しいとすれば、自筆年譜の「門を出でざる」とは反対に、番町の自宅から出て他所を頼ってその身を避けたのであった。鏡花が身を寄せた「本郷千章館」は、堀尾成章経営の書肆、『日本橋』（大正三年九月）の発行元として知られる。「千章館」は自らの名にちなむが、『日本橋』の奥附には「本郷区駒込曙町二番地」とある。

堀尾成章については、「補訂(二)」の昭和十二年七月九日の項の注記にも簡単に紹介したが、以下、現在までに判っている事歴を、福田穎造編刊『堀尾成章君追悼録』（昭和二十一年三月二十日。以下『追悼録』と略記）を中心に諸書と照し合せながら記してみる。

堀尾は明治十八年六月新潟生れ。父は成裕、母は孝子、六歳上の姉益恵があった。新潟は官吏の父の任地で、本籍は父祖の地長野県の本曾福島である。小学校一年の時、一家を挙げて東京へ移住、二十九年十月父成裕逝去（享年五十）にともない、姉益恵の嫁いだ新井英夫（弁護士）を頼り、母とともに福島県磐城へ移って、磐城中学校を卒業後、第四高等学校に入学、三十八年七月同校第一部法科（独法）を卒え（密田良二編『会員名簿』第四高等学校同窓会、昭和二十三年八月一日）、東京帝国大学法律学科（独逸法兼修）を卒業したのは四十五年七月である（『東京帝国大学卒業生氏名録』大正十五年五月二十日）。同学科卒業の法学士には、江木定男（四十二年七月卒）、西本道圓（同）、三宅正太郎（四十四年七月卒）など、鏡花の愛読者として知られる人物が多いが、堀尾は在学中の四十二年六月、第五回鏡花会の幹事を務めている（「補訂（十四）」参照）。

田島金次郎の「私の思附きでもあり肝煎りでもあつて催された、鏡花会初回の席上で、西本道圓氏が「同級の友人に一人鏡花熱愛者がゐます」といはれたので、私は「それは若し次回を開くことがあつたら是非出席して呉るやう話して置て下さい」といったのが縁で、知るやうになつたのである」（『友情の人』『追悼録』所収）

との回想によれば、同級の西本より二年遅れての大学卒業ということになる。前記『卒業生氏名録』では、同年の学科卒業生一五四名中、堀尾の席次は一四九番となっている。

帝国大学卒業時は、磐城から移った義兄新井英夫の本郷曙町の居宅に同居、当地で書肆千章館を興し、最初は月刊語学雑誌「独逸語」を発行していたが、大正三年九月、鏡花の『日本橋』を小村雪岱の装丁により刊行、これを皮切りとして文芸書の出版を始めた。「日本橋」の原稿は今尚ほ故人の匣底に秘蔵されてゐる（福田穎造「堀尾さんと出版業」『追悼録』という。また田島金次郎は「堀尾氏と小村氏との交誼は、百年の知己といったやうな間柄となり、雪岱氏が歿する際までも最も頼りとも力ともしてゐたのは堀尾氏であるときへ思はれるほど、始終克く面倒をみてやつた最も有力な外護者であつた」（前記「友情の人」とする。後年昭和四年二月十八日発信と推定される鏡花宛の雪岱・成章の合作書簡（泉名月氏旧蔵「鏡花遺品展」図録、泉鏡花記念館、平成二十五年十月五日）も残っている。

その後、千章館では大正四年十二月に女性雑誌「をとめ」を発刊したほか、『白羽箭』（四年十月）、『愛染集』（五年十月）と毎年一冊ずつの鏡花本を出し、他作家では武者小路実篤、小川未明、長田幹彦、森鷗外、谷崎潤一郎、夏目漱石、久保田万太郎、吉井勇らの単行本を刊行、堀尾自身の訳で『エムデン秘史』（大正六年四月（刊行日未確認）、『潜航商船ドイッチェランド号航海録』（同年七月同上）の二つの戦記の翻訳書もあった。

新聞広告からすると、千章館を閉じたのは大正六年十月以降だと思われるが、出版とは無縁の鉱山業へ転じ、北海道の満渾^{マンヅン}鉱山を主宰したのち、九年九月マガネサイトを採掘する満鉄傘下の南満鉄業株式会社に入って渡満し、十二年四月支配人、十三年二月取締役、十四年五月取締役総支配人となり、大連花園町の自宅と内地とを往復する生活が続け、昭和十九年二月二日東京九段の野々宮アパート

で死去（享年六十）。死亡時は同社取締役専務であった。二月七日青山斎場で社葬、葬儀では会社関係者のほかに笹川臨風、得能佳吉（四高同窓会）らが弔辞を述べた。戒名は龍雲院文成章道居士である。死亡広告（『東京朝日新聞』昭和十九年二月六日付・朝刊四面）の妻和代の住所は「熱海市仲田町常春荘」とあるから、鏡花未亡人としての疎開先と同じ町内であることが判る。すずの疎開の斡旋にも堀尾の関わっていた公算が大きい。

徳田秋聲の「和解」（昭和八年六月）の四章に、

「わたし毛利です。KI先生の代理として伺ったんですが。」（…）KI氏の古い弟子格のフアンの一人であるところの毛利氏は、渡瀬氏ともまた年来の懇親であつた。彼は会社の公用や私用やらで、大連からやつて来て、大阪と東京とのあひだを、往つたり来たりしながら、暫く滞在してゐた。

と、大連時代の堀尾が「毛利氏」として登場しているが、「和解」の中心人物である弟斜汀豊春に関しては、昭和十七年九月一日に、豊春長男の桜（大正十三年四月二十九日生、平成八年七月八日歿。享年七十二）の後見人として、親族会員泉（泉三）宅正太郎、寺木定芳とともに、桜を木曾郡上松町の新井熙・君子夫妻（姓からしておそらく堀尾の姉益恵の嫁ぎ先の血族であろう）の養子とする届出をしている（新井桜「『泉桜』はどこへ行つたか」帝塚山学院大学「日本文学研究」二十三号、平成四年二月一日に示された新井桜の戸籍による）。

これまで、『日本橋』の発行元千章館主人として知られてきた堀尾成章だが、「古い弟子格のフアンの一人」（先引「和解」）であつた彼が、鏡花存命中はもとより、歿後も遺族の後見の役割を完うしたこともまた銘記されなければならない。

昭和十四年（一九三九） 己卯 六十七歳

七月 初旬（カ）、折口信夫が養子春洋とともに國學院大学の夏期講習会

での講演を依頼するため番町を訪れた。折口と鏡花との面会は、さる大正十四年三月一日の鏡花全集出版記念会（於紅葉館）以来、二度目であつた。

【典拠1】 折口信夫「鏡花との一夕」（中央公論社版『折口信夫全集』三十二巻、平成十年一月二十日）*初出未詳。執筆は昭和十七年頃とされる。

—— 泉さんを二番町のお宅にお訪ねしたのは、お亡くなりになるやつと二月前位だつたらう。大学の夏期講習に引き出しに行つたのだが、—— 大して物事の判断に「おつかなびつくり」を用ゐぬらしい、大戯作者は、実に潔く、「出ますとも」と承引して下された。此事に関しては、その直後、私の師柳田先生から、とてもひどくお叱りを受けたものであるが、—— 私並びに私に唆かされた泉さんの軽はずみを、御自身の身にひきつけて悔いるやうなお気持ちで、お咎めになつたことは、其時其場に感じ乍ら、先生の教誨の前に頭をさげて居た私であつた。

併し其時の泉さんと私は、実に気持ちよく話しあつたものである。十数年以来、何処へでも同伴して行く習慣になつて居る家の春洋なども、単に金沢に少年時を育つたといふだけで、其はほのぼのとした愛情を持つた表情で、始中終顧みく／＼話してやつて頂いた。

泉さんの持論の黄昏時の感覚と、其から妖怪の怨恨によらぬ出現の正しさ—— かう言ふ表し方は、泉花^{（マ）}さんの厭ふ所でありさうだ。—— を主張する情熱と言ふよりは、別の熱を持つた話になつて来た。自分の職に絡んだことに話が向いて来ると、豎板に水と謂つた風に、流動して来た表現力、寧却て信頼をはぐらかしさうなまでの雄弁で、—— 今も手にとつて見る様に思ひ浮ぶ話しぶりで話された。

実は其時、甚申し決ないことだが、稲生武^{（マ）}大夫と謂へば、篤胤が書いた「稲

生物怪録」を触れて通った位にしか読んで居なんだ私である。

それ、あのよく貸し本屋が持つて来たぢやありませんか。——写本でさ——、稲亭隨筆だの、稲亭何だとか言ふし、御存じないんですか、——あきれた、と言ふ風で、私の無知を確めて、何だか却て恥かしさうな顔をしながら、さうかなあと言ふ風な表情を見せられた。

【典拠2】「鏡花会記事」（新小説臨時増刊 天才泉鏡花）三十年五号、大正十四年五月一日）

鏡花全集の出版を記念すべく、三月一日の夕、由縁もふかい紅葉館に泉先生をお招きして盛んな宴が張られた。（…）

出席者芳名 石渡泰三郎氏 井汲清治氏 伊藤鷗二氏（…）折口信夫氏（…）
鰐崎英明氏 秀しげ子氏 平岡権八郎氏 鈴木三重吉氏 鈴木喜代氏 以上

【典拠3】「折口信夫未発表資料 講義ノート 作家論・泉鏡花」（折口学と近代）IV、昭和五十三年八月二十日）

鏡花さんでは材料が多過ぎて片付きが悪いと思ふが、私は非常に鏡花さんの影響をうけてゐる、で悪口がつければいゝと思ひますが……。

鏡花さんに逢ふたのは二度で、一度は会で、一度は学校の用事で鏡花さんを訪うて行つた。註（学校の用事とは國學院の夏期講習の講師を交渉に行かれて承諾を願つて来られたが、間もなく鏡花の逝去で、この講演は流れて了つた。）

その時に「あなた稲生武太夫の事を書いたのを読みましたか。」と鏡花さんが言つたので私は平田篤胤の書いたものを読んだだけです。と言つたら、「その外にも沢山ある」と言はれました。

この前に鏡花全集が出るといふので会があつた。芝の紅葉館であつた。その時実は柳田さんや貴方の書いてられるものから随分材料を採つてます。というてられたが、鏡花式に延長してる。それは鏡花さん独特の為方です。

で、その稲生武太夫は一代記の話をした。武太夫が何故面白いのかといつたら、「面白いですもの、武太夫はお化けと度々巡り逢ふてます。而も恨みがないからそれが面白い。私の今迄書いたのは、さういふ処を狙つてるが仲々さういふ化物に巡り逢はない。」

鏡花はある時は一寸も書物を読まないで、戯作者の様に書くが、ある時は大そうな勉強家だ。

【注記】

折口の文章以外の傍証を得るべく、記載を控えていたが、調査に進展がないため、取りあえず登載しておき、確定を今後に課したい。

折口は典拠1で「二番町のお宅」と記すが、当時の町名は「六番町」（昭和十三年八月変更。「補訂（十四）」を参照）、もとは「下六番町」である。

典拠3は、慶應義塾大学での昭和十八年十一月二十三日の講義を聴講していた谷口陽子が筆記したノートにもとづく。文中に、全集出版記念会の席上、鏡花が折口に向つて「実は柳田さんや貴方の書いてられるものから随分材料を採つてます」と述べた、と語っている点は興味深い。であればこそ、逝去二か月前の体調が思わしくない時にもかかわらず、折口に会ったのであろうし、折口もまた面会の許されたことを徳としている。折口が鏡花を「ある時は一寸も書物を読まないで、戯作者の様に書くが、ある時は大そうな勉強家だ」と評していることにも注意を払っておきたい。

この全集出版記念会のことは、慶應義塾大学における昭和二十三年度「近代文学論」の講義（『近代文学論』中央公論社版『折口信夫全集ノート編』追補第三卷、昭和六十二年十二月二十日）の「十 鏡花と思想」「十一 鏡花の文体」には出ていない。

訪問の際に話題となった「稲生物怪録」は、鏡花作「草迷宮」（明治四十一年一月）の典拠の一つとされるが、折口にとっても忘れがたく、昭和二十三年十一月國學

院における田中義能・佐伯有義・山本信哉三博士追悼祭のために奉納芝居の脚本「稲生物怪録」を書いているほどである。

〔付記〕

明治三十年代は、おおかたの調査が済んでいると思っていたが、訂正も含めて、今回思いのほか多くの項目を補いえた。この時期が名実ともに鏡花の活躍期であったことをあらためて認識した次第である。

とりわけ、伊藤すずの芸妓桃太郎時代の記事は、「年譜」作成以来長らく探索していたもので、「都新聞」に四つの報を見出したことは幸いであった。これまで語られてきたすず夫人の態様を相対化するに足る内容をもっていると思う。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、青山学院大学図書館、本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

（よしだ まさし 日本語日本文学科）